令和４年度　第１回静岡市駿河区地域包括支援センター運営部会議事録

１　日　　時

令和４年６月 22 日（水）14 時～16 時

２　場　　所

駿河消防署　４階会議室

３　出 席 者

（委員）櫻井委員、中村委員、稲垣委員、紅林委員、前坂委員
美尾委員、望月委員

（駿河区地域包括支援センター）７包括

４　事 務 局

駿河福祉事務所高齢介護課　高齢者福祉係

保健福祉長寿局　地域包括ケア推進本部　地域支え合い推進係

５　傍 聴 者

０人

６　地域包括支援センターの事業計画報告及び意見交換

別紙　各地域包括支援センター事業計画書参照

＜＜大谷久能地域包括支援センター＞＞

包括：

大谷久能地区は高齢者人口が 3,000 人に満たない小さな地域で、民生委員は児童委員を合わせても 14 名のため、互いに顔、名前、自宅、成育歴、家族構成も知り合っている状況である。日常生活場面面接にあふれた地域で、地元の車屋さんに行くと、「どこどこの〇〇さんが最近車をぶつけてきたよ」と包括の看護師に話しかけてくれたり、圏域内を車でゆっくり走っていると、「こんにちは」と散歩や畑仕事をしているＳ型デイサービスやでん伝体操参加者と挨拶を交わしたり、地元の商店には高齢者が集まっていて、そこでお茶を飲むだけでたくさんの地域の情報が入ってきたり、住宅街の一角にある薬屋さんに行くと、「最近〇〇さんの元気がないんだよね」と店主が話しかけてくれたりする。包括への新規相談は通常名前と住所が必要だが、大谷久能地区では「〇〇さんちの隣の人だけどちょっと様子見てくれる？」だけで支援開始となる。大谷久能地区の地域と包括との関係は、在宅介護支援センター時代から 20 年以上かけて作り上げてきており、その間地域の人や包括職員の顔触れは変わっているが、今後も変えることなく関係を続けていきたいと考えている。

今年度の事業計画では、大谷久能高齢者のくらしみまもりたい活動を基軸としたフレイル、認知症予防、圏域内の専門職同士の連携した地域支援に重点を置いて取り組んでいく。昨年度コロナ禍により延期になったみまもりたい 10 周年記念事業大谷久能

健康福祉フェアを、10 月 15 日（土）に開催することを目指し、民生委員、地区社協、高齢介護課、南部保健福祉センター、生活支援コーディネーター、圏域内の病院、薬局、居宅やデイサービス等事業者と地域ケア会議で準備を進めている。イベントを通じて圏域内の多種多様のメンバーにてみまもりたいによる支え合い活動やフレイル、認知症予防に取り組むことで、圏域内のネットワークによる福祉力の向上を図っていきたい。また、地域の S 型デイサービスに認知症の方も普通に利用しているという地域柄があり、それを活かしてチームオレンジ活動を意識し、認知症があっても住みやすい大谷久能地区の推進を目指していく。今まで包括の事務所を圏域の端にある母体法人の特別養護老人ホームの一室に構えていたが、今年の４月１日から圏域の中央に位置する地域の公民館の２階に移転することが出来た。地域の公民館の中に包括があるという立地を活かし、地域住民の居場所としてフレイルや認知症予防活動に今年度力を入れていきたい。移転先のシーサイド大谷公民館では S 型デイサービスは開催しているが、自主的なサロンがないため立ち上げに取り組んでいきたい。また他の圏域内の公民館とリンクし、圏域内のすべての公民館での自主サロン的活動を地区社協、民児協、生活支援コーディネーターと協働していく予定である。

稲垣委員：

10 月 15 日のフェアの詳細について教えてください。

包括：

公民館を一日貸し切り、朝 10 時から 16 時までの間に大ホール、中ホール、２階部分、駐車場スペースを大きく４つのブースに分け、それぞれに市民の演目、健康チェック、圏域内の専門職、PT、OT、薬剤師、管理栄養士等への相談コーナー、健康チェックテストを実施する。世代間の交流やゲーム、認知症のステップアップ研修を開催するなど、盛沢山な内容となっている。

前坂委員：

病院や薬局が限られている地区だと思うが、現状在宅部門での困りごとはあるか。

包括：

病院や薬局が少ないことによって、何か問題があった場合には医師や薬剤師、看護師等が直接包括に連絡を入れてくれるため、逆に連携がとりやすい状況になっている。

櫻井委員：

取り組み内容に“アンテナ役を増やしていく”とあるが、今後どのように発展させていくのか。

包括：

総合相談を通じて、特に問題がなくても関係性を切らずに続けていくことで情報が入りやすくなっていくと考えている。今 70 代の方の居場所が少ないため、公民館での自主グループの立ち上げを支援している際、最初はメインになる方が動いてくださるが、比較的若い方々も一緒になって参加していく中で、いずれはその方々がメインに

なって動いていただけるよう働きかけている。

＜＜大里中島地域包括支援センター＞＞
包括：
　大里中島地域包括支援センターは大里西学区と中島学区の二つの学区を担当している。国道一号線から海までの細長い地域で、片側は安倍川になっている。大里西学区は街中の内陸にあり、中島学区が海側にある。大里西学区と中島学区を比較すると、高齢化率でほぼ１％の開きがあり、海側の中島学区の方がここ数年高齢化率が 27%を超している。大里西学区は昨年高齢化率 26.3%ほどになっている。特徴的なこととして、中島学区はここ数年 27%台で推移しているが、大里西学区は上り幅が急になっている。平成 30 年度の時点で２学区の高齢化率は-２％の開きがあったが、大里西学区が追い付いてきている。大里西学区は街中に近い分、買い物や医療の利便性が高い。１地域の自治会で住民有志のボランティア活動が活発に行われており、自治会にも良い影響が出ている。中島学区は古くからの農家が多く、一つの大きな親族関係が点在しており、近所の結びつきが非常に強い。また海に近い分商業施設が減少し、若者の流出も多く、移動手段が少ないなどの問題がでてきている一方、趣味の会など地元住民の会が活発に行われている。
　ここ数年コロナ感染と個人情報保護のため、従来のアウトリーチが難しくなってきているのを感じている。清水銀行が包括との連携を取りつつあるという話もあるが、圏域内に清水銀行はないため、それを参考にしずおか焼津信用金庫の代表の方に話をし、年金支給日に包括職員が銀行に出向き、高齢者に声掛けやチラシ配布をする等を依頼した。６月に実施予定だったがコロナのため延期になり、８月 15 日に第１回目を新しい試みとして実施する予定である。大里西学区の住民有志の会に、昨年認知症サポーター養成講座と圏域会議を合わせて実施することが出来た。地域の方も地域にいる高齢認知症夫妻の心配をしている背景があり、発展的に何かできないかと計画を立てている。昨年コロナのため頓挫した圏域会議、事例をもとに、近所の協力を得て解決したケースのその後の展開、専門機関の関わりに焦点をあて、地域の方々に様々な機関がフォローしているという実例を見てもらう勉強会を６月30日に行う予定である。中島団地の住民を対象にした認知症サポーター養成講座開催を促す共通的基盤整備の取り組みとして、中島団地で表面化している高齢化世帯への支援について地域支援コーディネーターや生活支援コーディネーターらと協働する。９月 11 日敬老会の日に中島団地で行われる敬老会の催しに、サポーター講座を包括が代行して申し込みと住民からの要望の聞き取り、生活支援コーディネーターにも入ってもらい、みんなで話し合いの場を持てるよう計画を立てた。
望月委員：
　昨年度の課題として、関係機関との役割分担が円滑に機能しないとの課題があり、

今年度は相互理解を心掛けるということで励ましや評価をして協働していくとの記載があるが、具体的な取り組みはあるか。
包括：
　精神疾患や障害の機関と２年程ケース対応で協働していたが、なかなか同じスピード感を持って解決に行かない苦しんだ期間があった。機関同士の関係も思うようにいかず、何が問題なのかについて上部機関にも相談をかけ、スキルの違いや力量、環境の違いなど、機関同士の相互理解をしないと解決が難しいとの助言をもらった。そのため今回は相互理解について記載した。
前坂委員：
　認知症初期集中支援事業のメンバーでもあるが、昨年駿河区の相談件数は 0 件であった。手続きが煩雑で使いにくい面もあると思うが、利用いただけたらと思う。利用にあたり手続きが面倒なのか、包括内で解決できているから利用しないのか、現状どうなっているのか聞きたい。
包括：
　制度の煩雑さ、包括の負担の大きさから使いにくい制度と認識している。利用者が一度でも受診している場合、受診が出来ているという認識になってしまうが、そこが途切れて困っている点をフォローされない状況になっている。昨年は往診専門にやっているところに依頼したが、初診で１回限りで自己負担 2,000 円程度で主治医意見書まで書いてくださるところがあり、包括が求めていた使い方であった。スピード感と値段の安さ、２回目の受診はしなくてよいと言ってくれるところが使いやすかった。
前坂委員：
　現状煩雑で使いにくい事業であるため、改良していく。

＜＜八幡山地域包括支援センター＞＞
包括：
　包括支援センターの近隣にある市営有明団地の中にある自主グループ、生活支援のための“有明応援団”と居場所の“なごみ”に力を入れている。市営住宅内で行政に場所を提供してもらい、集まれる居場所を作っている。今まで 10 名入ると満員になるような狭い場所だったが、20 名ほど入れるようなスペースを確保し、今までの場所は相談室として開設した。来所者の人数が増え、居場所の中で手芸をするような環境になりつつある。森下地区では全世帯の社会的弱者になり得る人の見守り体制を構築し、妊婦から老人までの見守り体制が出来ている。外国人についても、民生委員の中に多文化交流の役員をやっている人がおり、必要時通訳を手配する等、地域に外国人がいても仲間に入れる体制になっている。富士見地区では、延期になっていた徘徊認知症高齢者の捜索模擬訓練を今年度 11 月頃に計画している。自宅でずっと生活出来ることに重点を置き、サービスを使いながら在宅生活を続けていくことを支援している。有

明応援団は自主グループにもなっており、自分たちが困っていることを自分たちで掘り起こし、それに対応するサービスを自分たちで考え出している。美容院に行けない人がおり、住民の中で美容師をやっている方に月１回第４火曜日 1,000 円で理美容をやるということを４月からなごみで実施している。有明応援団やなごみは団地内の方へ実施していたが、理美容に関しては近隣住民にも拡げていけたらと考えている。今度事例検討会で、有明応援団やなごみの制度をケアマネジャーに紹介し、介護保険以外のサービスとして利用していただけるよう展開していきたい。有明応援団は自分たちの困りごとを見つけ、対応策を考えることが活発になっており、地域住民同士で次世代の担い手を探していくことが出来てきている。包括では社協と協働で月 1 回相談会を開催し、そこで新たな問題点がないかを確認するようにしている。その中で出てきたことを地域に投げ返し、新たに自分たちで考えるきっかけにしている。住民の活動を支援することを包括の仕事としている。

紅林委員：

有明応援団は何人くらいいるのか。

包括：

メインで活動しているのは５～６人で、実際に動く人は 20 人くらいいる。買い物は 1 回 100 円、ゴミ出しは 1 回 50 円がメインの作業になっている。

紅林委員：

調理が出来ない人への手伝いはあるのか。

包括：

なごみは元惣菜屋で厨房器具があるため、今後地域の人が集まって総菜を作り、みんなで食べてお茶を飲む会が出来ないか考えている。

紅林委員：

食べないと体力低下も起こるため、食事がしっかりとれるような援助を考えていただけるとありがたい。

＜＜小鹿豊田地域包括支援センター＞＞

包括：

圏域内にはＪＲ東静岡駅、静鉄沿線エリアがあり、区内で一番人口が多い地域である。年齢層も幅広く高齢化率は 23.1%だが、それぞれの地域によっては数字に差がある。西豊田地区（済生会周辺）は学生から高齢者まで生活しており、昔から住んでいる方もいるので高齢化は進んでいる。東豊田地区は静大近くのため、学生向けワンルームがあるが、現在は高齢者の入居率が高くなっている。バス停が遠い地域では交通手段の検討も始まっており、今年４月から地域の支え合い主導で移送を始める予定だったが、世界的情勢により車の納車ができず、今年 10 月に納入できる予定となっている。だだ、納車については不確定のため年内に開始できるとよいと聞いている。桃源

台（県立美術館のあたり）は坂が多く学生、ファミリー層が多いところで、谷田地区に関しては地域主導の移動売店が週２回来ており、継続的に買い物ができている。

圏域の問題としては、関わり拒否や SOS を出さない相談が増加しており、地域で孤立する認知症高齢者や 8050 の家族の相談が増加している。地域で高齢者を支える住人の意識や知識の向上、基盤整備が必要と考えている。今年度は気軽な相談窓口として包括を地域住民に周知してもらう。今更と思われるが、包括のことを「何となく知っている」「名前だけ聞いたことがある」との声もあったので、昨年同様包括のチラシの全戸回覧を実施、民生委員等に渡して訪問の際に配布してもらい、困った時にはここに相談するようにと伝えてもらっている。包括の存在を知ってもらうことを重点的に考えている。予防の発信として５月 24 日のＳ型デイサービスで「包括支援センターって何？」と可視化のためスライドを使って説明した。「はじめて場所が分かった」等の声もあり、やってよかったとの感想を持った。介護予防の情報提供として、かけこまち七間町、まるけあ手帳等を S 型デイサービスや地域の会合等で配布し、気になったら包括に連絡してもらうよう情報提供している。地域包括ケアシステムの強化で、昨年度包括に近い店舗等で認知症高齢者に対して何か支援ができないかと検討する取り組みを始めたが、実際に認知症高齢者がどのような人なのかを理解した上で模索していく。今年度西豊田地区で　認知症サポーター養成講座等も実施予定である。生活支援コーディネーターとの連携では、各地区の支えあい活動の会議に継続的に出席し、コーディネーターと協力し、３地区の活動の進捗状況を確認し、情報提供等をしていきたい。住民向けの勉強会や会議としては、今年度「自宅でずっと　私の終末を考える」を予定している。昨年度予定していたが、コロナで会議ができず、年度末にアンケートを取り、地域住民が終末をどう考えるのか、在宅で最期を迎えるための最初の一歩として情報提供できれば良い。

中村委員：

関わり拒否、SOS 出さないなどの相談に対しどのように対応しているのか。

包括：

民生委員が訪問しても拒否の場合は包括に連絡していただき、包括のチラシを持って近所を周っていると包括が訪問している。対象者にまた来てもいいかと聞いて了解が得られれば関わっていく。包括がこのように動けるのは民生委員から情報をもらえること、時には民生委員を前面に出し、一緒に来たよと言って対応することもある。

美尾委員：

小鹿豊田地区に限らないが、いろいろな層がいる中で、単身等の世帯は訪問していただいて目が入りやすいと思うが、病院で相談業務をする中で、家族がいて日中独居、家族関係が悪い、退院できないということがあり、家族がいるが日中独居等の場合の対応はどうしているのか。

包括：

困ったケースはある。本人が何かやりたい意向をキャッチできれば日中独居の方でも紹介ができ、支援に繋がるケースもあれば繋がらないケースもある。そういう場合にはゆっくり１～２年と時間をかけながら、支援に繋がる場合もあるため、時々様子を見ながら対応している。

美尾委員：

病院だと時間をかけて支援することができないので、時間をかけて支援出来るのは地域の良さだと思う。

＜＜大里高松地域包括支援センター＞＞

包括：

圏域の特徴として、地区により高齢化率が 16%から 37%と大きな差があり、平均世帯人員が 2.0 人と静岡市の平均値より下回っている。５つの小学校区を受け持っており、それぞれの地区で高齢化率や世帯状況に差があるが、サロンやでん伝体操自主グループなど、どこの地区も活動が活発に行われている。包括としてはそれぞれの地区まつりに参加したり、地区の広報誌に紹介文を掲載したり、地区の方からの協力体制が強化された中で活動が出来ている。地域から孤立して家族で課題を抱えている世帯も多いため、ケース対応型地域ケア個別会議を活用し、課題解決を図っていきたいと考えている。重点項目 1 点目として、主任介護支援専門員連絡会を通して、圏域の介護支援専門員の横の繋がりと資質向上を目指す。取り組み内容として、主任介護支援専門員連絡会を開催することと、自立支援プラン型にケアマネジャーにオブザーバーとして来ていただくこと、自宅でずっとミーティングの開催、ウエルカフェでアウトリーチのような形でなんでも相談会を開催する予定となっている。将来的に主任介護支援専門員や介護支援専門員が、自主的に活動できることを目指しており、6 月 29 日に第２回目の主任介護専門員連絡会を開催予定である。重点項目２点目は自宅でずっとミーティングを開催し、医療と介護、地域住民の連携を図る。特に中田学区では、社会福祉協議会の生活支援コーディネーターと地区社協の役員と事前の打ち合わせをしている。今年度医療と介護の関係者と順次打ち合わせを行い、会議を開催していく予定である。重点項目３点目として、認知症になっても住み慣れた地域で暮らすことが出来るよう、チームオレンジの活動に繋げていくというもの。子ども向け認知症サポーター養成講座の開催、南部学区支え合い活動“み・て・こ”に該当する。南部学区ではS形デイサービスのボランティアを中心に支え合い活動が盛んに行われている。以前支え合い活動の発足時に認知症サポーター養成講座を開催して、ほとんどの方が受講済みのため、今年度はステップアップ研修を４月末に実施してチームオレンジの活動に繋げていく予定になっている。包括では南部学区の社協の運営委員会に月２回参加し、認知症について役員に伝え、ステップアップ研修に繋げていきたいと考えている。最後に配布資料と事業計画について説明をしたい。１枚目はチラシの配架、昨

年度運営部会でメールアドレスの掲載の助言があったため改良した。２枚目は高齢者虐待の対応について、こうした特徴を民生委員や介護支援専門員、サービス事業者にお伝えし、早期発見のＰＲをしている。３枚目は民生委員向けのたよりを毎回民児協の際に配布し、件数やどういった地区の特徴があるかをお知らせしている。４枚目は相談件数全町別とし、毎年データをまとめて冊子にして地区の方に配布している。５枚目のチラシは県地域リハビリテーション強化推進事業の活用や共通的基盤整備に関係する。今回富士見学区にチラシを配布し活動に活かすが、今後は順次他地区にも拡げていく。実際６月頭に他地区で県リハビリテーション強化推進事業を活用しているため、管理栄養士等地区の専門職にも話をしてもらおうかと考えている。

稲垣委員：

ウエルカフェとはどこでやっていて、相談内容はどういったことが多いのか。

包括：

コロナになる前は圏域内の調剤薬局で相談会を開いていたが、コロナになってから実施が出来なくなった。圏域内にあるウエルシア薬局高松店で貸してもらえるスペースがあるため、偶数月の月末木曜日に何でも相談会を開催し、チラシ配布等をしている。作業療法士にも協力を得られそうだったため、今後専門職にも参加して貰えたらと考えている。

前坂委員：

ウエルカフェはその店舗のみか。

包括：

ウエルシアの中でウエルカフェのスペースがあるのは葵区 1 カ所、駿河区 1 カ所にしかないそうで、他でもやれるとよいが、清水銀行での相談会や場所を貸してもらえるところがあれば出張相談会を考えている。

＜＜長田地域包括支援センター＞＞

包括：

長田地域は安倍川と用宗の海、焼津市との境にある山々に囲まれた地域になっている。人口が 29 包括の中で３番目に多く、高齢者の人口は 1 番多い。長田東、長田南、川原と地区が別れており、長田南が漁業中心とした地域で、昔から親族関係のある方々が集中して生活しており、高齢化率が最も高い。スーパー、金融機関、交通手段が限られているため、その点で困難を抱える高齢者が多い地域である。長田東地区は安倍川駅を中心としており、静岡駅まで一駅のため、若い世代が増えてきている。高齢化率が低くなっている地域だが、昔から農業をしていた方々が高齢化しており、高齢者にとっては同様に交通手段で大変さがある方々も一定数いる。この地域ではコロナワクチン接種の予約支援など、住民主体の活動も多くみられる。長田東地区と長田南地区に挟まれた場所に川原地区がある。川原地区は昭和 50 年代以降に新しい家々が建っ

た地域で、前期高齢者の人口が増加しているのではないかと言うほど、高齢者の人口割合が増えている。集合住宅も複数あり、民生委員や医療機関からの相談も多くなっている。

令和３年度の成果は、相談対応力の向上のために、毎朝の事例報告や事例検討を継続的に行い、多面的に事例を捉えて支援に繋げること、感染症対策の実施、ケアマネジャー等を対象に障害を持つ方々に関する研修会をオンラインで開催し、関係構築、オンライン環境の拡充ができた。また自立支援プラン型会議も実施出来、概ね好評をいただいている。コロナ禍でも多様な運動の機会を得られるようにと、ケロケロおさだ体操の動画を作成した。これらを継続し発展させた形で今年度の計画を立てた。事例に対する、総合相談、対応力を付けていく。地域のケアマネジャーのみならず、サービス事業所も顔を合わせて意見交換が出来ないかと考え、オンライン環境の有無のアンケートをとり、その結果をもって今年度は虐待の勉強会をケアマネジャー、包括だけでなく、サービス事業所等様々な機関に集まってもらい、それぞれの機関がそれぞれどういった役割があり、どんな関わりが出来るのかを話し合えるようなものの開催を予定している。またケアマネジャーらが主任ケアマネジャーを中心に繋がり合って、スキルアップしていく場やネットワーク作りの支援をするため、前年度から圏域のケアマネジャー名簿を作り更新している。年２回ケアマネジャー事業所を訪問し、主任ケアマネジャーの事例検討等の打ち合わせに参加し支援をしている。主任ケアマネジャー同士がネットワーク構築ができるような勉強会も企画する予定である。地域の特性に合わせた自立支援・重症化防止として、前年度作成したケロケロおさだ体操を DVD 化し、今後多くに配布し、すぐに再生して使えるようにしていきたい。孤立しない、させないお互い様のネットワーク作りとして、前年度まで圏域内の老人福祉センター、生涯学習センター、保健センター、体育館の方々に集まってもらい、情報交換、意見交換をして、孤立しがちな方がいないかを話し合っていた。男性の居場所づくりを前年度までは考えていたが、コロナ禍で集まる場を作るのは難しいと言うことでほぼ停止状態になっていたため、抜本的に方向転換を考えなければならなくなった。その中で各地区の社協の方々と協働して、孤立しないさせない地域の仕組みづくりのための勉強会を開催する予定で、認知症の支援に対する課題について各地域の意向聴取、認知症サポーター養成講座等の企画開催、生活健康相談会の実施、最終的に一つにまとめた何かができないかということで、介護予防世代間交流、生きがい活動探しを目指した取り組みとして、仮称で“good　at プロジェクト”を企画、実施していこうとしている。定年後何もせずに過ごして、10 年後 15 年後介護が必要になり、地域の方々から包括に相談があって駆けつけても、重症化している方もいるため、この流れを食い止められるよう、根本から変えられる企画を考えている。

櫻井委員：

ケアマネジャー等色々な人達への勉強会を多く計画しており、地域住民へのアプロ

ーチが見えにくいが、何か取り組みはあるのか。
包括：
　それぞれの地区社協と支え合い活動を立ち上げて始めている。そこで認知症に関する勉強会や情報交換会を今後行えるよう地域の方に働きかけている。“good at プロジェクト（仮称）”で、活動の担い手に繋がるように若い人たち、子どもも含め、関心のある人たちに集まってもらい、得意なことを持ち寄ってもらい、それを名刺に書いてお互いに情報交換することから、何かの活動に繋がっていかないかと考えている。地域の人と相談し、夏以降に実施していく。

＜＜丸子地域包括支援センター＞＞
包括：
　丸子地域包括支援センターは長田北地区と長田西地区を担当している。長田北地区は新しい住宅が増えているところもある。長く住んでいる方々と新たに越してきた世帯が混在している地域で、長田西地区より高齢化率が低い。地区内にスーパーは少なく、バス等を利用して地区外へ買い物をしている高齢者も少なくない。昨年度から新たに１カ所Ｓ型デイが増え､Ｓ型デイサービスのスタッフが大変熱心に行っている地域である。長田西地区では早い段階から地域の支え合いが組織化されており、病院や買い物への移動支援の“ちゃー丸号”や、簡単な困りごと解決の“ちょこボラ隊”の活動が継続して行われている。ちょこボラ隊は 100 名近くの方が登録されていて、地域の高齢者等のちょっとした困りごとの対応をしており、地域住民が積極的に支え合っている地域である。民生委員と民生委員ＯＢの方々が見守りの目を持っている地域である。担当圏域では５年前から総人口数は減少しているが、高齢化率は上昇しており、長田北地区は 29.７％、長田西地区は 33.9％となっている。1ヶ月の相談件数は年々増加している。相談内容としては、コロナ禍で自宅にこもり ADL が低下している相談や、支援困難で長期間関わるケースが多くなっている。
　総合相談支援事業では前述のようなケースが増えているため、１つ１つのケースが医療介護福祉だけでは補えない相談や、高齢者と同居する家族の相談等、相談内容が複雑になっているとここ１、２年強く感じている。多方面との連携や情報収集等が必要としている状況で、複雑化多様化する相談にも対応する力を職員一人一人が持って行けるよう、ケースに対してみんなで検討・振り返りをし、それぞれがスキルアップを行っていけるようにしている。毎朝ミーティングで前日の相談ケースの共有、支援の方向性を確認する時間を重視し、今後も引き続き実施していく。毎朝のミーティングとは別に、事業所内で事例検討の時間も設け、月 1 回は法人内４包括での相談援助の勉強会を実施しているため、相談力向上を目標にこちらも継続していきたい。包括的・継続的ケアマネジメント支援事業については介護支援専門員のネットワークづくりやスキルアップに繋がるように支援をしていくため、相談援助の勉強会や障害支援

機関との勉強会等を、長田包括と共に今年度も継続して実施していく予定である。また地域の資源情報も介護支援専門員に繋げるような機会を持って行きたいと考えている。介護予防ケアマネジメント事業については、地域の高齢者が自ら健康増進、介護予防に取り組めるように支援することとして、S 型デイサービスやシニアクラブなどでの啓蒙活動の実施をしていく。今年度に入り S 型デイサービスやシニアクラブにも訪問しているが、コロナ禍を通して自宅に籠っていて体を動かしたいとの要望が多くあり、包括の理学療法士が運動をメインにした介護予防を行った。S 型デイサービスの利用者やスタッフ、介護支援専門員には広報誌等を配布し、コロナ禍になってから自宅でできる運動を記載して定期的に発行しており、その後はホームページにも公開していく予定である。認知症総合支援事業として、地域住民の認知症の理解を深めるため、昨年度実施予定で丸子圏域に回覧で案内した認知症予防講座、軽度認知障害のスクリーニング検査を、昨年度はコロナ禍で延期したが、今年度は５月 13 日と 20 日の２日間で実施した。検査のため包括職員が対応出来る人数として20人を定員として募集し、ほぼ定員通りの希望があった。多くの方が次年度も参加したいとの希望があったため、継続していく。地域住民の方の要望もあるため、今年度は今回の参加者とは別に第２回目も実施したいと考えている。チームオレンジについては、昨年度から長田西地区の代表者に声掛けし、コロナ禍で集まることが難しく昨年度は提案のみだったが、今年度は長田西地区の複数の団体に説明をする機会を持ち、長田西の民児協では８月に認知症サポーター養成講座の実施と、10 月にステップアップ講座を実施する予定で準備をしている。昨日長田西地区社協でも説明して実施希望があり、今年度実施予定で日程調整中である。多くの方が参加したいと要望があるため、一度に行うのは難しいが、各団体の希望を確認しながら実施していきたい。地域での認知症カフェも再開しているため職員も参加して状況把握と情報発信を行っている。S 型デイサービスでも介護予防の運動だけではなく、認知症予防のための講座も行っていきたいと考えている。

美尾委員：

丸子包括に限らないが、虐待ケースで病院のソーシャルワーカーに対する要望は何かあるか。

包括：

地域では本人からの話を聞く場面は多いが、本人からは家族の状況について等の話が出ないことも多い。医療の場面で、家族に繋げなければならない部分が多くあると思うので、その点で連携できるとありがたい。